

## マタイによる福音書 15:29-39

先週の日曜日、イエス様の復活を共に祝った私たちが甦りのイエス様と共に神様を礼拝するために、再び、この御堂に集められて参りました。そして、御言葉はその私たちに二つのことを語ります。先ず一つは、イエス様と共にある私たちは、繰り返し同じことを経験するという事です。ただ、繰り返しであるがゆえにまた、私たちは「またか」と思うってしまうのです。けれども、教会を初めて訪ねた方はどうでしょうか。特に、痛みや苦しみを抱えつつはじめて教会を訪ねた方々にとっては、ここに記されていることは何かを期待せずにはいられない出来事のように思うのです。そして、この、何かを期待せずにはいられないということですが、では、繰り返し同じことを聞いている私たちが、イエス様に何かを期待することがまったくないのかということではありません。同じように痛みや苦しみを抱えたとき、同じようにイエス様に何かを期待せずにはいられない、それがこうして御言葉に聞いている私たちなのです。ですから、この、同じことを繰り返し経験できるというところに、イエス様の憐れみと、私たち自身の信仰のあり方が現されているように思うのです。それは、私たちの日々の歩みも、その信仰もしっかりと定まっていらないからです。このことはつまり、御言葉が語るもう一つのこととは、信仰者である私たちとは常に何かを期待せずにはいられない、そういう小さな者だということです。まただから、御言葉もそんな私たちに対するイエス様の思いを次のように伝えてくれているのです。

「群衆がかわいそうだ。もう3日も私と一緒にいるのに、食べ物がない。空腹のまま解散させたくはない。途中で疲れ切ってしまうかも知れない」と、イエス様はわざわざ弟子たちを呼び寄せて、こう命じられたのですが、ここに甦りのイエス様と、共にこうして礼拝を献げている私たちとの関係性を見ることが出来ます。従って、31節の後半に「群衆は、・・・見て驚き、イスラエルの神を讃美した」とあることは、この時の私たちの姿でもあるのでしょうか。それは、私たちが神様を讃美するのは「見

て驚く」ような出来事を経験をしたからです。そして、その中で一番大きなものがイエス様の甦りの出来事でもありました。ですから、ここでイエス様が「かわいそうだ」と仰っていることは、私たちにとっては、イエス様の甦りの事実抜きには語れないものです。それゆえ、イエス様の憐れみの中で行われる礼拝というこの行為は、同好の士の集まりのような、そういう狭いものではありません。広く、深く、私たちの思いをはるかに超えたものであるからです。ですから、この日の御言が伝えることは、イエス様が憐れみ深いお方であることだけを伝えるものではありません。イエス様の憐れみがいかに深く、広がりをもっているか、このことを私たちに知らしめるものであり、それは、この深く、広いということこそが、イエス様の甦りの朝、私たちが知らしめられたことでもあるからです。

そこで、先週私たちが経験したことをもう一度振り返りたいのですが、イエス様を葬った墓が空であったというこの事実は、神様の御心が私たちの思いをはるかに超え、私たちには計り知れないものであるということです。それゆえ、私たちにはすべてを理解することができない、けれども、イエス様の墓の前に立ち、私たちが分からないと思うこの気持ちは、キリスト教信仰においてはとても意味深いものでもあるのです。なぜなら、私たちの信仰とは、この分からないという気持ちを大切にするとところから深まり、広がってゆくものでもあるからです。そして、それを私たちに教えてくれているのがこの日の御言葉です。そこで目を向けたいところは二つ、一つは、御言葉が「イスラエルの神を讃美した」と語るところです。もう一つは、イエス様がなすべき仕事を終え、次に移ったところが「マガダン地方」であったということです。

御言葉がわざわざ「イスラエルの神を讃美した」と語っているのは、讃美した人々がイスラエル以外の人々であったからです。つまりは、異邦人、異教徒であったということです。そして、マガダンと呼ばれているこの場所ですが、それが具体的にどこなのかは学者の間でも議論が分かれるよ

うです。一説には、マガダンはマグダラの言い間違いとも言われていますし、また別の捉え方では、ガリラヤ湖の東南の奥地、つまりは、ガリラヤ湖を挟んだ、マグダラとは正反対の地だとも言われています。ただ、舟に乗っての移動とあることから、やはりガリラヤ湖の反対側だろうとも言えるのですが、舟での移動が沿岸に沿っての移動なのか、それとも、沖に漕ぎ出してのことなのかは定かではありません。このように、聖書には未だ意見の統一が図られていないところがいくつもあるのですが、ただ、マガダンが具体的にどこなのかはともかくも、一つだけはっきりしていることがあります。それは、イエス様がユダヤ教以外のものと接触する可能性のある、その境界線上を移動しておられるということです。つまり、その活動はユダヤという狭い場所に止まるのではなく、外へと拡大して行った、開かれていたということです。しかも、この異質なものを、自分たちとは隔たったもの、遠いものにイエス様は進んで近づき、「かわいそうだ」との憐れみの気持ちを素直に表されたのです。

ですから、甦りのイエス様が私たちと共にいてくださっているということは、このようにイエス様が内に籠もるお方でないことを示すと共に、その関わり方は表面をなぞるだけの通り一遍のものではないということです。外へと向かっていったということは、そこにある人々と深く関わるためであり、しかも、大事な点は、イエス様が何かを期待せずにはいられないすべての人々とも、深く、広く、関わって下さっているということです。それは、何かを期待せずにはいられない私たち人間は、常に定まらない者でもあるからです。それゆえにまた思うのです。その私たちが人に何を伝えることができるのかと。ただ、そう思うのは私たちだけではなく、ここでの弟子たちもそうでした。それは、ここで味わうことになるそれ以上のイエス様の憐れみを、弟子たちはこの少し前にすでに味わっていたからです。このことはつまり、ここでのイエス様の求めにどう対処すればいいのか、それについては、弟子たちも十分に分かっていたということです。従って、ここでのことは、イエス様の雷が落ちて当然であったようにも思うのです。ところが、イエス様は洩る弟子たちに何も余計なことは仰らずに、前回と同じことを繰り返す命じられた

だけのです。そして、イエス様の指示に従って、弟子たちがパンと魚を配ったところ、前回同様に群衆は食べて満たされ、しかも、七つの籠が残された、こうして群衆は食べきれないほどの恵みに与ることになったのです。

そこで少し考えたいのですが、イエス様の憐れみに触れた弟子たちは、自分たちがどうすればいいのかを本当に分からなかったのでしょうか。ただ、そのことをイエス様は咎め立てているわけではありません。けれども、同じことがもう一度繰り返され、それも、同じことがここで起こっているわけです。しかも、その繰り返される出来事はそれほど遠い過去のことではなく、昨日今日の出来事でもありました。それにも関わらず、弟子たちはどうすればいいのかが分からなかった。これは、分からなかったのではなく、したくなかった、やりたくなかった、そして、このできない、やりたくないとの弟子たちの思いは前回も同じだったのです。ですから、人はなかなか思うようには変わらない、御言葉はこの点を語っているようにも思うのです。ただ、言いたいことはそれだけなのでしょう。私たちはそれほどまでに忘れっぽく、そこまで愚かなのでしょうか。むしろ、弟子たちにはやりたくない明確な理由があった、それは、前回とは異なり、目の前にある々が自分たちの同胞、仲間でない、少なくともそう思ったからなのではないのでしょうか。

ところで、私がどうして弟子たちのそうした姿に引っ掛かってしまうのか、それは、自分にも思い当たるところがあるからです。そして、それは、内と外とを分けて考えるということです。別の言い方をすれば、それは、身贔負が強いという言い方もできましょう。また、自らの限界を知っているということでもあるのでしょう。あるいはまた、それは、異質なものに対する蔑む気持ちがあったとも言えましょうし、その異質なものと関わることへの恐れがそうさせているとも言えるのでしょう。つまり、自分が安心し、納得できるところに止まろう、止まりたいと思うその気持ちが弟子たちをして何かすることを躊躇わせている、そして、それは、勇気がないからであり、また、イエス様に対する不誠実さがそうさせているとも言えるのでしょう。ですから、社会全体がそうした内向きの傾向を強めている昨今、排除、差別というも

のが以前と比べて強くなってきていることを思いますと、自分の内側という狭い所を守ろう、守りたいという気持ちが強く表れることは由々しきことでもあるのでしょうか。それゆえ、この傾向が強くなればなるほど、関わりは狭められ、人と交わる機会はどんどん小さくなってしまいます。ですから、それではいけない、そう思い直して、関わりを広げることが大事なのでしょうか、しかし、そこで心に留めたいことは、イエス様は狭い所に安住しようとする弟子たちのことを諭すのでもなく、また、叱るでもない、イエス様の求めたことは前回と同じことを繰り返すことだったのです。

それは、イエス様の憐れみが現れ出るのはこの繰り返しの中でのことだからです。つまり、繰り返し同じことを続けていくからこそ、イエス様の憐れみは、私たちの生きるこの世界に、広く、深く、私たちの思いをはるかに超えた形で現されていくのです。つまりは、すべてが詳らかにされなければ何かが始まらないのではなく、むしろ、その反対であるということです。分からないところが残され、同じことが繰り返されるからこそ、イエス様との関わりは深められることになる、それは、そこに現されるものがイエス様の憐れみであるからです。つまり、イエス様が甦られ、その甦りのイエス様が私たちと深く、広く関わってくださっているということと、ここでのこととは、この点において重なり合っているということです。それは、イエス様のその思いというものが狭いところに安住するような、そういう仲間内だけの満足に終わるものではないからです。傷を負い、心に深い痛手を被ることも恐れず、その思いが外へ外へと開かれていく、つまり、イエス様の私たちに向けられたその思いとは、外に向かっていくからこそ未来につながっていくことになる、そういうものだということです。そして、そこに現れるものがイエス様の憐れみであり、それが同じように繰り返されているということです。それは、イエス様が未来に希望を繋いでいるからでもあります、イエス様の憐れみが繰り返し、繰り返し、共にある人々に投げかけられているのはそれゆえのものだということです。ですから、それは、群衆だけでなく、同じ過ちを犯す弟子たちにも同じように、その憐れむ気持ちは投げかけられてい

る、それが甦りのイエス様であるということなのです。

それゆえ、イエス様のこの憐れみは、私たちが決める、また決めつける境界線によって左右されるものではありません。甦りのイエス様と共にあるすべてのところで、そして、そこに生かされているすべての人々に、等しく同じように注がれている、それがこのイエス様の憐れみでもあるのです。そして、この日の御言葉が私たちに語っている最も重要な点は、私たちにはこの憐れみが実体験として与えられるということです。従って、イエス様の甦りを信じ、甦りのイエス様から多くの恵みをいただく私たちの信仰とは、感覚的な問題で片づけられるものではありません。実体験に基づくものだということです。そして、それは、この日の御言葉が明らかにするように、救われたとの実体験が私たちをしてこうして讃美の声を上げさせるということです。

従って、その私たちが何かを語り、また伝えようとする場合、この世のロジックとは大きく異なるところから物事は発せられることとなります。なぜなら、私たちが用いる「兄弟姉妹」というこの呼称が単に戸籍的な意味に限定されてはいないように、私たちの発する言葉は、この世の論理をはるかに超えた、天と地とを貫くほどの大きな広がりを持つものだからです。ですから、この世のロジックに囚われている世の人々にそのことをいきなり投げつけたところで、それがすぐに分かってはなりません。けれども、それが伝わらないかと言えばそうではない、イエス様のその思いが外へと開かれていったということはそういうことであり、それがこの日の御言葉を通して語られていることでもあるのです。ただ、だから、こうすれば必ずこうなるというものが私たちに与えられているわけでもありません。イエス様の気持ちが外に向かい、様々な人々と関わったように、御言葉の実現のためには、私たちもまた世の人々と関わり、そして、その人たちと礼拝を共にする以外他に、方法はないからです。私たちの語るべき言葉は聖霊自らが与えてくれると言われていることはそういうことであり、それは、私たちに問われていることがそこで何か気の利いたことを語れるか語れないかではないからです。こうしてイエス様と共に歩む私たちのこの交わりには、

イエス様の憐れみが満ちあふれており、それゆえ、共にある人々とこの憐れみを私たちが分かち合うから、イエス様の憐れみは、共にある人々にも実体験として伝わることになるのです。そして、昨年、そのことを深く知らされたのが私たちでありました。なぜなら、牧師館園舎の建築において経験したことは、まさにこの日の御言葉が語っていることと同じことでもあるからです。

牧師館園舎の建築は、与えられ、満たされたというだけでなく、七つの籠がその後に残った出来事でもありました。そして、それは、私たち藤沢教会員だけがその恩恵に与ったのではなく、教会員以外の人々とも共にこの恵みを分かち合うものでありました。このことはつまり、私たちのこの交わりの中には、イエス様の憐れみが満ちあふれているということです。ただし、それはだから、あれもあるこれもある全部あるということではありません。これまでを振り返るなら、あれもない、これもない、全部ない、それゆえ、もしかしたら、イエス様の憐れみなど、どこをさがしてもない、ない、このないないづくしのイメージを思い描いてしまったことがあったのかもしれない。このことはつまり、私たちの信仰は揺れ動き、何かに期待せずにはいられない経験をしてきたということでもあります。けれども、この度の経験が私たちに教えてくれたことは、イエス様の憐れみがないのではなく、あるということでした。そこで、最後に、コロナ以前のことで、ある幼稚園保護者が語った言葉を皆さんにご紹介したいと思います。

その保護者が語ったこととは、「みくに幼稚園は何もないけど、子供の成長に必要なものは全部そろっている」というこの一言でありました。それゆえ、この何もないけど全部あると、そう思っていただけところに、御言葉の語る真実が現されているように思うのです。このことはつまり、イエス様の憐れみを分かち合うために必要なものとは、それを上手に説明できる言葉などではなく、また、人が欲しいと思えるものだけを過不足なく提供できれば、それですべてが事足りるということではありません。必要なことはただ一つです。私たちのこの交わりの中に共にいてくださっているのがイエス様であり、それはいつどんな時にも、ということです。そして、それは、

私たちが考えるような物理的、精神的な意味での充足感によってもたらされるものではありません。この世の論理で説明しきれないものだけに、もしかしたら、私たち現代人にとっては、何もない、というところに多少の気持ちの悪さが残ってしまうなのかも知れませんが、けれども、確かにある、全部ある、イエス様のこの憐れみを分かち合うことが許されているのが私たちでもあるのです。それは、イエス様という、教会の、私たちの信仰の、この中心、核になるものが私たちの中には、ないのではなく、確かにあるからです。それゆえ、その保護者の方が語ってくれたことは、私たちの教会についてのことだけを語ったわけではなく、甦りのイエス様を信じる教会の本質そのものを示してくれたように思うのです。ですから、私たちと接する人たちにそう思っていただけことに、私たちはもっと自信をもっていいように思うのですが、けれども、私たちがもしその保護者の方と同じように思えないとしたら、その時、私たちはどうすればいいのか。

御言葉が私たちにこの日語ってくれていることは、それが甦りのイエス様の弟子としてのその姿でもあります。従って、その答えははっきりしています。墓が空であることに気づいた婦人たちがイエス様の御言葉に立ち帰り、歩み始めたように、御言葉に立ち帰ればこそ、そこで私たちは新しい明日に向かって歩み続けることができるのです。それは、そこで私たちは必ず共にあるイエス様の憐れみに与ることになるからです。しかも、このイエス様の憐れみは、私たちに確信が得られなかったとしても、そこで必ず与えられるものなのです。なぜなら、甦りのイエス様というお方は、何もないと思うその私たちを用いて恵みを与え、そして、この分かち合いの出来事を通して、人と人とが喜び集う豊かな交わりを備えようとしてくださっているからです。ですから、私たちがもし何かに期待せずにはいられないことがあったとしたら、その時にこそ、甦りのイエス様と共にあることをその都度自信をもって思い起こしたいと思うのです。このことをもう一度心に留めて、新しい歩みに導かれて参りましょう。祈りましょう。